

## あたらよ

中川真緒

ここに来るまで、私は夜を知らなかった。

この家に連れて来られた日の夜、辺りは静寂に包まれていて、窓の外は墨をこぼしたように真っ暗だった。私は、息を吸うたびに暗闇が肺に沁み込んでくるような息苦しさを覚えた。

これが夜なんだな、とあのとき私は思った。夜は暗くて、孤独で、怖かった。自分の中に夜が入ってこないように、私は布団に潜り込んで目をかたく瞑り、赤ん坊のように身体を小さく丸めた。

私がかつていたところは東京の真ん中で、昼も夜も関係なく、ぎらぎらと明るくて騒がしかった。私が眠っているときに夜で、起きているときに昼だった。だから私には、ここの強制的な夜というものが、ひどく暴力的で残酷に思えたのだった。

朝が来て夜が来る、夜が明ければ朝になる、そんな当たり前のことを、私は十三歳でやっと知った。今ではむしろ、自然に完全に身を委ね、夜は眠り朝になれば起きるといふ原始人めいた生活が肉体に馴染み、エクスタシーにも似た感慨を覚える。そんな毎日の中で、私はちゃんと人間という生き物だったんだなあ、とぼんや



りと思う。

祖母の家は、小さな港町の海沿いにぽつんと建つ一軒家で、見えるものは海と山くらいしかない。堂々とそびえ立つ富士山や、果てしない海がいつでも見えることに、二週間経った今ではほとんど驚かなくなった。

静かに揺れる海を一人ぼうちと見つめていると、何か言葉にはできないもやもやとしたものが湧いてくる。ふとした拍子に、かつての東京での生活や仲間たちのことを思い出すこともある。でもきつとあそこに戻りたいわけではない。だけど私のいるべき場所はどこではない気がして、かといってどこでもない気がして、私はずっとどこかを探して彷徨っている。そんな私を、富士山は冷ややかに見下ろしている。

ママ。ママは元気にしているだろうか。私がいなくなって寂しいと思っっているだろうか。それともむしろ、厄介払いができたと思っっているのだろうか。

そこはかつて、私にとって世界のすべてだった。どこからかぼつぼつと集まってくる彼らが、私の唯一の仲間だった。私たちは身の上話などしないから、どこの誰なのかも知らない。しかし、全員がどんよりとした暗い目をしていて、その目を見れば絶望しているということはわかった。私もあの目をしていたのだろう。希望なんて何一つなかった。私の頭の中には、常にぼんやりと死のイメージが浮かんでいた。鋭く光るナイフとか、おびただしく流れる鮮血とか、燃え上がる炎だとか、ものすごい威力の爆弾だとか、そんなもの。死にたかった。殺してやりたかった。この世界ごと、すべて壊してしまいたかった。

各々が適当に酒を飲み煙草を吸い、どうでもいい話で笑って、誰かが音楽を流せば大声で歌いながらはちゃめちゃに踊った。私たちは、たぶん完全に分かり合っていた。互いの傷を舐め合いながら、何となくそこにいた。そのぬるま湯に浸かったような心地よさは、家でも学校でも一度も味わったことがないものだった。ぎらぎらと降り注ぐネオン。大量の空き缶や空き瓶やお菓子の袋など、ありとあらゆるゴミ。どこからか聞こえる

誰かの下品な笑い声。美しいと思った。このまま世界が終わればいいのにと思った。

そんな日々が今になっては遙か遠く、幻だったような気もする。東京の隅で行き場を失った若者たちと、その一人だった私。あれは私だったようにも、私ではなかったようにも思える。

ママがこの地で生まれ育ったという事実を、私はまだ飲み込めないでいる。私の知っているママは、いつも濃い化粧に胸元の開いた安っぽい下品な服を着て、酒と煙草の匂いが染みついていた。適当な時間に泥酔して帰ってきては、「あんたなんか産むんじゃない」と殴られ蹴られ物を投げつけられた。男の人を連れ込んで、私など見えていないかのように甘ったるい嬌声をあげた。そして我に返った瞬間、私をきつく抱きしめ、「美夜みよがいなくなったらママ死んじゃうよお」と嗚咽をあげ、「美夜ごめんねえ、こんなママでごめんねえ」と私の髪を塗るように撫でまわすのだった。物心がついたころから、そんなママに振り回される生活が私の日常だった。私はずっと、部屋の隅で息を殺していた。

そんな身勝手に不安定なママと、ここの呆れるほどの牧歌的な風景は、全くもって結びつかなかった。ママの母親である祖母はごく普通のおばさんで、ママが小さいときに亡くなったという祖父の遺影も、ごく普通の男性に見える。この地で、ママはいつたいたいののように育ってきたのだろうか。ママの過去のこと、自分の父親が誰なのかも、ママがなぜ東京で暮らすことになったのかも、私は何も知らない。祖母に訊けば知っているだろうが、それはまだ少し怖いような気がする。

朝起きて居間へ降りると、祖母はいつも台所に立っていて、おはようと笑って急須でお茶を淹れてくれる。祖母が淹れてくれるお茶はなんだか甘くて深い味がする。吹き抜ける芳醇な香りも、鮮やかな緑色も、なんだか生き生きとしている。そして、白米に味噌汁、魚に卵焼きといった朝ごはんが運ばれてくる。こんなに豪華な朝ごはんなんて初めて、と私が言うと、祖母は苦々しく笑った。祖母は料理が上手で、ごはんは何でも美味



しかった。しかし私は、味やメニューそのもの以上に、誰かが私のためにごはんを作ってくれるということに  
なんだか泣きそうになってしまう。

私は常に空腹だった。給食を食べるためだけに小学校に行っていた。キモいとか汚いだとか、そんな悪口も、  
暴力も、嫌がらせも、いつしか私の心には何も届かなくなった。中学校に上がると給食がなくなり、もはや学  
校に通う意味などなかった。新しい制服は、すぐに部屋の間で埃を被った。どこに行くともなく街を彷徨い、  
引き寄せられるように仲間たちと出会った。家にいる時間は徐々に減っていった。

それは五月になったばかりの夜だった。私は中二になっていた。私がふと家に帰ると、背中を丸めるように  
正座をしているママと、五十代くらいの女性がぱっと私を見つめた。

「あたしのお母さん」

ママが顎をしゃくってぶっきらぼうに言った。ママは泣いていたようで、目が真っ赤に腫れていた。

「美夜ちゃん？ おばあちゃんだよ」

女性は目をぎゅうと細めて今にも泣きだしそうな顔をした。

「おばあちゃん……？」

祖父母の話など一度も聞いたことがなかったし、その存在すら考えたことがなかった。この女性がママの母  
親であり私の祖母である、それをなかなか飲み込めず、私はただ呆然と立ちつくしていた。

「美夜ちゃん、元気でよかった。ずっと会いたかったのよ」

女性は愛おしそうに目を細めて私を見つめた。そしてすぐにママのほうへ顔を向けて、きっと目を吊り上げ  
て言った。

「じゃあ、美夜は私が連れて帰るから」

連れて帰る？ この人が？ どこへ？ どういうこと？ 何が起こってるの？ 私はひどく混乱した。自分

の祖母だという初対面の女性と、いつになくしょげた様子ママ。私はきよろきよろと二人を交互に見つめた。

「やめて！ 私の娘よ！」

ママが急に耳をつんざくような金切り声を上げて、私に駆け寄ってきつく抱きしめた。化粧品と酒と煙草と香水の混ざった、むせ返るような匂いが強く香った。

「じゃあちゃんと育てられるわけ？ まともな生活ができるの？」

祖母が声を張り上げた。ママの腕の力がぎゅうと強くなった。

「できるもん。あたしがここの一人で育ててきたんだもん」

ママは子供みたいに口を尖らせる。

「ねえ七海、美夜をよく見なさいよ。こんなに痩せ細って、みすばらしい服で。ずっと中学に行っていないことも、家に帰ってないことも、あんた何も気にしていないじゃない。自分のことばかり。男のことばかり。それでも母親だって言えるわけ」

ママの腕から少し力が抜けた。私はママの顔を見上げた。唇がプルプル震えたかと思うと、大粒の涙が落ちた。メイクはどろどろで、肌は荒れて皮が剥けていた。醜いと思った。哀れだな、と思った。自分勝手に、情緒不安定で、男がいないとだめで、寂しいときだけ私に縋り付いてくる、弱くて可哀想な女。

「美夜はどうしたい？」

祖母が静かな、それでいてよく通る声で言った。

「おばあちゃんと一緒に行く」

私は、ママを捨てた。

「静岡に行くよ」



そう言って祖母は歩き出した。電車で品川駅まで行き、新幹線に乗った。新幹線は初めてだった。私は二人掛けの席の窓際に座った。車窓の景色が疾風のように流れていくのが面白くて、じっと眺めていた。新横浜を発車して少し経ったころ、前方にぼんやりと白っぽい大きな山が見えた。

「ねえ、あれ、富士山？」

私は高揚して祖母のほうを振り返った。祖母は頷いて、にやりと笑って言った。

「あと二十分くらいかな」

私はまた車窓に流れていく景色を眺めた。長いトンネルを抜けると、富士山がさっきよりも大きく見えた。腕時計をちらりと見ると、ちょうど二十分が経っていた。新幹線はどんどん進んでいく。そして急に、さっと景色が開けて、目の前に富士山が現れた。私は思わず息を呑んだ。あまりにも大きくて、美しかった。山頂は雪をかぶって、青く堂々とそびえ立ち、目を凝らせばごつごつとした山肌まで見えた。今まで見たどんな写真も比べ物にならない、圧倒的な迫力があった。そのあまりの威厳に、私は若干の不気味さすら覚えた。窓に顔を押しつけるようにして、まばたきも忘れてその姿に見入っていた。

知らない間に眠っていたようで、祖母に肩を叩かれて目を覚ますと、静岡に着いていた。電車に乗り換えて何駅目かの小さく寂れた駅で降りた。ホームには海の匂いが立ち込めていた。遠くには富士山が見えた。私は、地の果てに来てしまったような気がした。祖母の家に着いて玄関を開けると、なぜだか懐かしいような匂いがした。

六月になった。手続きや準備が終わったようで、新しい中学校に通うことになった。生徒は一学年三十人前後でクラスしかなく、全校生徒は百人にも満たない小さな学校らしい。制服は野暮ったいセーラー服で、スカートは膝が隠れるほど長かった。リュックは黒、靴と靴下は白で、すべて学校指定のものだった。どう頑張ってもださかった。所詮は田舎の中学だ。ここに来てしまったからには我慢しなければならない。

担任の優しそうな女の先生に連れられて、二年とだけ書かれた教室に入った。クラスメイトたちの顔が一斉にこちらを向いた瞬間、私はさっとたじろいだ。生徒全員の顔が、まるでひまわり畑のように輝いていた。瞳はきらきらと光に満ちて、いかにも幸せそうに白い歯をむき出しにして、全身から生命力のような何かみずみずしいものが溢れているようだった。そうか、ここで生まれ育ったらこんな人間になるのか。私は自分がひどく汚れた人間に思えた。クラスメイトたちの何の後ろ暗さもない笑顔が怖かった。

「望月美夜です。東京から来ました。よろしくお願ひします」

ぼそぼそとそれだけ言って、小さく頭を下げた。席に座ると、俯いて机の模様を見つめた。私と同じ年数でこの長閑な土地でのびのびと育った同級生たちに、私のような人間が対等に扱ってもらえる自信がなかった。

もし仲良くなれても、私の本性が見えたら皆離れていくだろう。今まで学校に良い思い出など一つもない。私はもうこれ以上傷つきたくなかった。たくさんの生徒と同じ教室にいるのに、どうしようもない孤独を感じた。気を緩めたら涙がこぼれてしまいそうだった。

休み時間になるとクラスメイトたちが席の周りに一目散に駆け寄ってきた。

「美夜ちゃん、よろしくね!」

「美夜ちゃんってめっちゃ美人だしなんか大人っぽい!」

「東京から来たんだよね、都会人じゃん!」

ゲリラ豪雨のように矢継ぎ早に言葉が降ってくる。男子も女子も垣根なく、親し気な笑顔で無遠慮に話しかけてくる。私はただ曖昧に頷いたり笑ったりするだけだった。ああ、こんな態度では皆どうせすぐ離れていくだろう。私だって本当は仲良く話したい。本当の友達というものが欲しい。学校生活というものを経験してみたい。でも、私はこの土地の異分子だ。机の周りに群がる生徒たちの満面の笑みが、何だかものすごく遠く感じる。もし私がここで生まれ育っていたのなら、この子たちと自然に話せていたのだろうか。自分がひどく惨めでちっぽけに感じた。



次の休み時間もその次も次も、怒涛のおしゃべり攻撃は止むことがなかった。私のことをやたらと褒めちぎったり、各々自己紹介をしてきたり、何か困っていることはないかと気を配ってくれたりする。私は少しずつ顔の緊張が解けて、徐々に自然な笑顔になっていくのを感じた。

しかし、私はふと気付いた。誰も私のプライベートなことは深く聞いてこない。私が東京でどんな暮らしをしていたのか、今はどこに誰と住んでいるのか、なぜ引越してきたのか、そういったことには誰も触れない。先生があらかじめ指示しているのだろうか。田舎だから私の情報はもう回っているのだろうか。それとも私はどう見ても訳アリに見えるのだろうか。私はいろいろな訝ったが、皆のはじけるような笑顔には、少しの悪意も偽りも、腫れ物に触れるような躊躇いも見出せなかった。きつとこの子たちは、何の意識もしなくとも、人との接し方を弁えているのだろうか。その堂々とした姿はまるで富士山のように、私はそこはかかない恐怖を覚えた。ああ、やっぱり、私とは何もかもが違う。私は顔では笑いながら、心にひびが入る音をかすかに聞いた。

転校して一ヶ月ほど経った。どうせすぐ離れていくと思っていたクラスメイトたちは、まだしつこいほどにまとわりついてくる。学校は楽しい。すぐ楽しい。私はまるで生まれ変わったかのように明るく笑い、誰ともよく喋るようになった。特に仲のいい数人ができた。クラスメイトは皆まっすぐで純朴で、まるで善良という言葉を擬人化したようだ。余所者の私を疎ましがることもなく、積極的に話しかけてくれる。私はそれがすごく嬉しい。私は生まれて初めて学校生活というものを味わっていた。

なのに私は、クラスメイトたちをふいに殺したくなる。私はやっぱりこの子たちとは違う。私はもっと醜い人間だ。この子たちに、私の心の奥底などわからない。家にも学校にも居場所なんてなくて震えていたときの孤独。ママに殴られ蹴られたときの痣。投げつけられた瓶の破片が刺さって流れた血の赤。お金がなくなり飢えに苦しんだ日々。ゴミだらけの東京の隅に集まる少年少女たちの暗い目。そんなものが、理解されるわけがない。だから私は、長閑な自然に囲まれて、汚いものなど何も知らず、のびのびと育ってきた人間たちの



顔を、苦しみで歪めてみたくなる。何の罪もないのに、それどころかものすごく優しいのに、そんな残酷なことを思ってしまう自分自身が、堪らなく嫌だ。それなら私が死んだほうがいいかな、と思う。そんな鬱々とした気持ちを、たまに海に向かって吐き出しに行く。静かに揺れる海は、いつでもやさしく受け止めてくれる。

夏休みになった。友達に誘われるがままに、炎天下にチャリを飛ばしてあちこちに出かけた。カラオケで大はしゃぎした。新作のアイスクリームを食べに行った。課題をやるうと集まり、結局開きすらせずに喋り尽くした。電車に乗って街中に出て、服やコスメを見てはしゃいだ。浴衣を着てお祭りに行った。友達の親の車で川に行つて、泳いでバーベキューをして花火をした。それらはどれも、私が思いつく限りの最高の夏だった。今まで私のもとに落ちてこなかった幸福が、雪崩のように一気に降りかかってきたようだった。走馬灯をずつと見ているかのように、ふわふわとした眩暈に包まれていた。気付けば同級生たちを自然に「友達」と呼んでいた。たまに自分も皆と一緒にここで生まれ育ってきたのだという錯覚に陥った。毎日に忙殺されて、憂鬱になつている暇もなかった。

そんな日々はあつという間で、気付けば八月も終盤に差し掛かり、私はほとんど手をつけていなかった夏休みの課題に一日中追われていた。二十二時を回ったころ、突然玄関のチャイムが響いた。こんな時間にいったい誰だろう。さっと身体がこわばった。祖母はもう眠っているはずだ。私は部屋を出て、灯りをつけずに忍び足で玄関まで行くとドアスコップを覗いた。あつと声が出た。そこにいたのはママだった。私はすぐにドアを開けた。

久しぶりを見るママはあまり変わっていないように見えた。少し痩せてやつれたようにも、逆に太って幸せそうにも見えた。いや、私はこんなにすっかりとママの顔を見たことがあっただろうか。私は今初めてママと向き合ったような気がした。改めて見るママは美人で、どことなく私に似ていた。やっぱり、私の親なのだな



と思った。

私を見るなりママの目から涙が溢れ、駆け寄ってきて強く抱きしめられた。

「美夜、美夜ごめん、ママが全部悪かった、ごめん、ごめんねえ」

嗅ぎ慣れたママの匂いが香った瞬間に、私は、ママに会いたかったんだな、と気が付いた。私はママの首元に顔をうずめた。泣いてしまいたいそうだった。こんなママでごめんね、と泣きじゃくるママの頭をぎこちなく撫でた。ママが落ち着くまで待って、私は言った。

「海に行こう」

ママと並んで海岸に腰を下ろした。話したいことがたくさんあった。しかし何から話せばいいのかわからず、私はしばらく黙っていた。波の音だけが静かに響いていた。

「元気にしてた？」

とりあえずそんなことを聞いた。

「うん。美夜は？」

「元気だよ」

会話が途切れて、また波の音に包まれた。しばらく経って、私は口を開いた。

「ねえ、ママの過去のことを教えて」

「過去のこと、ねえ……」

ママはぼんやりと遠くを見つめた。

「まあ、あたしはここで生まれて、この小中を出て、高校は難しいところに入ったんだ。あたし勉強は中学までずっと一番で、けど高校になった途端にだめになった。まあ当たり前だよね、所詮こんな田舎者なんだから。塾に通ったりして最初は頑張ってたんだけど、ぜんぜん効果なくて。努力が足りなかっただけかもしれないな」

いけど、あたしはすぐ心が折れちゃった」

ママはへへと苦笑いした。

「でもその塾でね、初めての恋に落ちたの。大学二年生のバイトの講師。身長が高くて、メガネがよく似合っていて、手がすごく綺麗だったな。あたしは勉強がわかんないって言ってその講師にまわりついて、わざと身体を密着させたりして、なんか秘密の関係って感じてドキドキしたなあ」

そう言ってママは楽しそうに笑った。

「そのうちあたしもう我慢できなくなっちゃって、ノートを広げて話してるときに、こっそりへ先生のことを好きです」って書いて。そしたら先生がへ俺も七海ちゃんが好き」って書いて、その下に電話番号も書いてくれて。もう心臓がばくばくしてたよ。その夜すぐ、書かれた番号に電話してさ。そこでデートの約束をして、そのあと付き合うことになったの」

ママはふうと息をついた。その横顔は幸せそうでもあり、少し苦しそうにも見えた。

「でも、デートらしいデートは二、三回くらいだったな。あとは全部あの人家に呼ばれて、着いたらすぐにベッドで、終わればすぐ寝ちゃう。けどあたしは不満なんかなくて、むしろ幸せだったんだよね。あの人何回も言うんだよ、大好き、愛してる、ずっと一緒にいたい、結婚したい、とかね。だから愛されてるんだなあだし、って、早く結婚したいなああって、本気で思ってた。あー、ほんとばかだったな。だって、あるときあたしは十五歳で、あの人二十歳だよ。普通に犯罪だしロリコンじゃん」

ママは弱々しく笑った。

「冬くらいにはエスカレーターしてて、何かあるごとに、お前が全部悪いんだ、って怒鳴って。あたしのことを中卒の馬鹿とか、社会のゴミとか罵ってさ。でもそのあと急に甘い声になって、お前は俺がいなきゃ生きていけないだろ？俺がずっと一緒にいてやるから大丈夫だよ、とか言うの。なんか、やり口が巧妙っていうか、



狡猾っていうか。俺のことが好きなら当たり前だよな、ってお金を要求されたりもして。あたしはお小遣いもなくなつて、口実をつけて親からもらつたり、親の財布から盗んだこともあるよ。だんだん暴力もひどくなつてね。殴る蹴るはもういつものことで、あとはあの人の気分で、服で隠れる部分を切られたり、煙草の火を押しつけられたり。でもそんな状況でも、あたしはまだあの人が好きで、全部あたしが悪いんだって思い込んで……。なんでだろね、ほんとに」

その男の人はママに似ている。そしてそのときのママは、少し私に似ている。ママはそれに気付いていないのだろうか。

「高二的、クリスマス前だったな。あの人はゴムを嫌がるから、あたしはずっとピルを飲まされて、でも生理が来なくて妊娠検査薬を使ったらまさかの陽性で。だから、あ、これはもう運命だ、って思つて。あの人も喜んでくれるだろな、あ、そうだ、クリスマスプレゼントに報告しよう、それでちゃんと籍を入れよう、とかあたしはもう完全に浮かれてた。産婦人科で妊娠五週目って言われて、そのあとエコーを見たら、まだヒトには見えないけど、でも確かな命があつて、なんかすごい泣けてきてさ。あたしはもう母親なんだ、この子を守らなきゃいけないんだ、って。これからあの人と幸せな家庭を築いていくんだ、なんてね」

ふっ、とママは苦々しげに小さく笑つた。ママの年齢からして、たぶん、その子は私だ。

「クリスマスイブの日、あたしはプレゼントとケーキと、エコー写真を持ってあの人の家に行った。ケーキと一緒に、話があるって言つてエコー写真を渡したの。でもあの人は理解した瞬間に破り捨てて、その上から思いきりケーキを投げつけた。もう目が血走つてて、『お前勝手にピルやめたんだろ、わざと妊娠したんだろ』って怒鳴られて、あたしは、違う、ピルは飲んでた、結婚してくれないの、って叫んだけど、思いっきり殴られて吹っ飛んだ。墮ろす墮ろさないの喧嘩になって、でもあたしはそのときもまだ結婚するつもりだったんだよね。でもそのうちに、流産させてやるってお腹を殴られそうになって。そのときあたし急にハッてなつてさ。

あたしは何されてもいいけど、この子だけは守らなきゃ、って。だから身体を丸めてお腹だけは守った。少ししたらあの人は落ち着いて、また優しい声で、七海ごめんなあ、俺七海のこと愛してるから、絶対結婚してやるから、だから今回は墮ろしてほしい、子供なんかまたいつでも作ればいいだろ、とか言ってきた。そのときに、子供なんか？ 結婚してやる？ っと思って。あたしはここでやっと、ああ洗脳されてたんだなって気付いたんだよね」

ママは苦しそうに顔をしかめると、ふっと空を見上げて口をつぐんだ。波の音が大きくなった。

「あたらよ、って知ってる？」

ママが唐突に言った。

「あたらよ……？」

「明けるのが惜しいくらいに素晴らしい夜、って意味。可能の可に、惜しいに、夜って書いて可あたらよ惜夜。高一のとき古典の先生が言ってる、なんか好きでさ、ずっと覚えてたんだよね」

ママは手のひらに長い爪で、可、惜、夜、とゆっくりと書きながら言った。ママのごてごてしたネイルがたまにちらりと光った。

「高二で妊娠して、しかも相手は二十一歳のクズ男で、なんてどうしても親に言えなくて。だからあたしは東京に行こうと思ったの。親の財布から数万だけ抜いて、〈探さないでください〉ってメモだけ残して夜中にそっと家を出て。で、そのときに見た空が、ものすごい綺麗で、なんかあたし泣いちゃってさ。そのときに、ああ、これが可惜夜かな、って思って。とにかくそれくらい美しく、なんかもう、このままお腹の子と一緒に死んじゃおうかなと思ったりもしちゃって」

ママの目がちらりと光った。泣いているのかもしれない。

「けど、そんな考えはすぐに追いやって、あたしがこの子を守らなきゃいけないんだ、って思い直して、お腹



に手を当てる夜空に誓ったんだ。母親になります、って」

そこまで言うともママはわっと泣き出した。あのときあたし誓ったのに、なのに、なのにあたし、ぜんぜん母親になんかなれなかった、美夜に酷いことしかしてこなかった、美夜、ごめん、ごめんなさい。私はむせび泣くママの背中をさすり続けた。

「ねえ、美夜って名前はその夜からとったの？」

私が尋ねると、ママは嗚咽しながら頭を大きく縦に振った。嬉しかった。なんだか胸が熱くなった。もういいよ、と言いたかったけれど、何も言わないほうがいいような気がして黙っていた。

しばらくして、ママはふうと大きく息をついて、頬を手の甲で乱雑に拭いた。

「東京に着いてすぐ求人誌を買って、寮付きの仕事に片っ端から電話したんだけど、全部断られた。日中はほとんどの外にいて、夜はネカフェ。切り詰めてたのに持ち金はもう底をつきかけて、最終的に夜職の求人いろいろ調べてみて、一番安全そうだった寮付きのお店に電話したの。電話に出たオーナーは、現状を洗いざらい話しても受け止めてくれて、そのあとお店に行っって少し話したら、もう寮に案内されて部屋を開けてくれた。部屋は狭かったけどベッドも最低限の家具家電もそろってた。オーナーはとりあえず寝ていいって言ってくれて、不安はあったけどそれよりも疲れきって、だってそのとき、確か五日くらいはまとりに寝てなかったから、ベッドに横になった瞬間に眠りこんじゃった。それで次の日にオーナーといろいろ話をして、雇ってやることになって、そのまま美容院に連れていかれて、髪を染められてセットされてメイクされてドレスを着せられて、気付いたらあたしは完璧なキャバ嬢になってた」

綺麗だったんだよ若いときは、とママは笑った。私もそうだろうなと思った。

「オーナーはほんとに良くしてくれてさ。つわりがひどいときは休ませてくれて、いろいろ手続きとかも教えてくれて、無事に美夜が産まれてきてくれたときは一緒に泣いてくれたし、その後も子育てと仕事を両立でき

るように配慮してくれたりとか」

そう言われてみると、小さい頃にはママはいつもそばにいたような気がする。ママのぬくもりとか、心地よい揺れとか、そんなものをうっすら覚えているような気もする。

「威張れることじゃないんだけどさ、美夜が小さいときはそれなりに頑張ってたんだあたし。オーナーもいたし、同じ寮で助けてくれる人もいて、それで無事に美夜を小学校に入学させられたのに、あたしったらなんかそこで気が抜けたっていうか、まあ率直に言っちゃおうと遊びたくなっちゃった。言い訳でしかないんだけど、あたしそのときまだ二十三で、まだ若いのに今までろくな恋愛してこなかったな、って。それに今度こそ良い男を捕まえて、美夜にお父さんを作ってあげたいなあ、とか思ってた。それですぐに恋に落ちては結局また前みたいになって、散々都合よく扱われた挙句、みんな子供の存在を理由にして逃げてく。あたしはただ、両親がいて美夜がいて、平凡でも幸せな家庭を築きたかっただけなのに、うまくいかなくて、どうしたらいいかわかんなくなっちゃって、それでつい美夜を責めて酷いことばっかりして……。美夜、本当にごめんさい」

ママは私に向かって頭を下げてまた泣き始めた。ママが私のために家庭を作ろうとしていたということは意外だった。ママはただ好き勝手に男遊びばかりをしているだけで、私の存在なんてほとんど見えていないようだったから。ママは最低な母親だと思う。でもきつとママはそこまで悪気はなくて、ただとにかく不器用で幼稚で弱い女だったんだろうな、と思った。私はなんだか胸が苦しくなった。

「ママ」

私呼びかけると、ママはぱっと顔を上げた。

「私はママを許さないと思う。だけど、私はママが好きだよ」

ママは泣いているのか笑っているのかわからないくしゃくしゃの顔になって、嗚咽しながらごめんねとありがとうを繰り返した。



「それでね」

泣いているかと思っていたママが、突然明るい声を出した。

「やっと結婚することになったの。美夜、お父さんができるよ。あたしもゼロから、いや、マイナスかな、もう一回母親として頑張るって決めたの。だから美夜、東京に戻ってきてほしい」

急で驚いたし、正直なところあまり信用できなかった。ママがいかに母親に向いていないかも、どれだけ男運が悪いのかも、私はすべて見てきた。

「どんな人なの」

「それがね、二十六歳で年収二千万の証券マン。すごいでしょ。バーで仲良くなって、次に会ったときに赤いチューリップの花束をくれて、それで花言葉調べてみてって言われて調べたら〈愛の告白〉でさあ。ロマンチックすぎない？ しかもすごいイケメンで優しく、あたしのことめちゃくちゃ大切にしてくれるし、美夜のこともすぐ受け入れて父親になりたいって言ってくれて、もう来月には籍を入れようってなって、もう家とか見に行ってるんだ。すごいよ、豪邸だよ」

ママは恍惚とした顔で、まるで少女みたいにぺらぺらと喋っている。私はどうも引かかった。そんな金持ちのイケメンが、ママと結婚したがるだろうか。騙されてるんじゃないだろうか。本当に良い人でママが幸せになれたらいいけれど、なんだか怪しさを感じてしまう。

「ね、美夜、ママと東京に戻ってきてくれるよね？」

泣いて反省したかと思ったら、相変わらずの身勝手だ。思わずため息が出る。なのに、こんなママでも、本当にママが幸せでずっと機嫌がいいのなら、また一緒に暮らしたいと思ってしまう。でも、やっぱり信用できない。それに、せっかく慣れてきたこの土地を離れるのも寂しい。

「ちょっと考えさせて」

とりあえずそう言うともママは悲しそうな顔をしたけれど、わかった、と言った。



ママがあくびをして、私もつられてあくびをした。時計を見ると二時半を回っていて、二人ともすっかり眠くなっていた。祖母の家に帰り、私の部屋で一緒に寝ることになった。ここはもともとママの部屋だったらしい。ママはへお母さんへ おじゃましています。美夜の部屋で寝ます。七海と書いたメモを居間に置いて、家出したときと同じで懐かしい、と楽しそうに笑っていた。

狭いシングルベッドに、私たちは身体をくっつけて寝転んだ。ママの肌は柔らかくてあたたかくて、嗅ぎ慣れた匂いがある。ママはひどい親だ。でも私は、そんなママでもどうしても嫌いになれない。私はかつてのママのように洗脳されているだけなのかもしれない。だけど、別にそれでもいい。だってママは、私のたった一人の親なのだから。私は子供のようにママに抱きついて、そのまま深くやさしい眠りに落ちた。

目が覚めると、私はまだママに抱きついたままだった。強い日差しが差し込んでいて、時計を見ると八時過ぎだった。そっと起き上がったが、ママは起きる気配もなく気持ちよさそうに寝息を立てていた。ママを置いて階下へ降りると、祖母はいつも通り台所に立っていた。

「おはよう。昨日ママが帰ってきたよ」

祖母は私のほうを見ずに、無表情で大根を切っている。

「仲良さそうに、ぎゅうってくっついて寝てたね」

見られていたのか。祖母の声は無機質で、感情は読み取れない。私はそれ以上何か言うのをやめた。

お茶と、ごはん、しらす、卵焼き、大根の味噌汁。いつもの朝食を食べながら、私はママから聞いた話をぼんやりと反芻していた。

朝食を食べ終わる頃に、祖母が珍しく向かいに座った。

「七海から何を聞いたの」



祖母は何となく落ち着かない様子で聞いた。

「うーんと、学生時代とか、私の父親とのこととか、東京での話とか、ほぼ全部、かな」

「そう……」

祖母は遠くをぼんやりと見つめた。

「私が悪かったんだよ。美夜には辛い思いさせたね。ごめんねえ」

祖母がぼつんと呟くように言った。なんだか昨夜から謝られてばかりだ。

「七海が高校に入ってから、様子が変なものには気づいてたよ。けどいつも楽しそうだったもんで、まあ男だろうなくらいに軽く思ってた。年末だったね、起きたら置き手紙があって七海がいなくなってる、えらいことになったって、すぐ搜索願を出して。でも警察はあんまり動いてくれなくてねえ。住民票を取って、何回か東京まで迎えに行ったけど、結局七海には会えなかったっけ。そしたら七海から娘が生まれたって手紙が来たもんで、きつと幸せにやってるんだろう、って少し安心して。今思えば、探偵を雇うなり私が張り込むなりもって本気で探してれば、七海はまあ自業自得だとしても、美夜は救えたのにな。だもんでね、美夜には本当に申し訳ないって思ってるんだよ」

手紙、ちゃんと取ってあるよ、と祖母は立ち上がって後ろの引き出しを開け、私に封筒を手渡した。ママの字でこの住所と祖母の名前が書かれていて、消印は私が生まれた年の九月八日、東京からだ。裏には七海とだけ書かれていた。開けると一枚の紙が入っていて、へお母さん 心配をかけてごめんなさい。私は元気にやっています。9月1日に娘が生まれました。名前は美夜（みよ）です。かわいくて元気な子です。それではまた。七海と書かれていた。そして、一枚の写真。そこには赤ちゃんを抱いた若くて美しいママが幸せそうに笑っていた。私は自分の小さい頃の写真というものを初めて見た。なんとなく面影があるようにもないようにも見える。

「またって書いてあるからその後も来るかと思ったのに、来たのはこれだけ。ずっと心配はしてたけど、でも

七海も十八になってたし、賢くて優しい子だったし、まさかあんなことになってるなんて……。私の考えが甘すぎたね」

祖母は苦しそうに顔を歪めた。

「七海はね、ここらへんじゃ有名な優等生だったんだよ。神童なんて呼ばれてね、親としては鼻が高かったよ。けど高校ではうまく成績が伸びなくて、私はそんなに気にしてなかったんだけど、七海としてはやっぱりプレッシャーが大きすぎたのかなあ。お父さんは早くに亡くなって、私は忙しくてなかなか構ってやれなかったもんで、七海もきつと寂しかったんだろ。私が、もっと七海をよく見てれば、もっと話を聞いてれば、何か言ってあげてればって、後悔しても遅くないよ。七海が相談してくれてたら、私もできる限りのことはしたんだけどね……。そりゃあ母親としては七海は最低だよ。だけど私も決して良い母親ではなかったね」

祖母は涙ぐんで、ふと仏壇のほうに目をやった。遺影には人の好きそうな男の人が笑っている。よく見れば、口元はママにも私にも似ている気がする。

「五月に入ったくらいに、知らない番号から電話がかかってきてね。出てみたら怖い男の人が七海の借金を返せって怒鳴ってて、どうやら七海が勝手に私を保証人にしてたみたいだね。言い合いになったけど、七海に会えるなら私が返すって約束して。それで七海の働いてる場所を教えてもらえたもんで、すぐそこに電話して七海を出してもらって。七海は私だってわかった瞬間切ろうとしてたけど、お金を渡すって言ったら渋々会ってくれることになって、それで東京に行ったの。七海の話聞いて、まったく呆れかえったっけ。今までのこともだし、美夜のことを聞いてもわからないっていうし。借金のことも覚えてないの一点張り、あれは詐欺かもしれないね。まあそれで美夜を連れ出せたと思えば安いもんよ」

祖母は悔しそうに涙を滲ませている。なるほど、そういうことだったのか。



そこにドアがそっと開いてママが入ってきた。こんな明るいところで、しかもすっぴんのママを見るのはずいぶん久しぶりの気がした。肌は少し荒れて目は腫れているものの、すごく綺麗だと思った。

「ごめんなさい、急に帰ってきちゃって」  
ママはおどおどして目が泳いでいる。

「おはよう、七海。ごはん食べる？」

祖母が優しい声で言っ、ママが頷いた。祖母は立ち上がって台所に行った。ママはそわそわと家の中を見回して、変わってないなあとかここは変わったとか呟いている。

祖母が私と同じ朝食とお茶を運んでくる。ママは幸せそうに目を細める。

「しらす、すっごい久しぶりに見たかも」

ママはすぐに箸を取って、しらすを少しつまんで口に運び、噛みしめた瞬間、急に肩を震わせ始めた。

「ちょっと七海、なんで泣いてんの」

祖母は笑って、ママにティッシュの箱を手渡す。

「静岡のしらす、久々で、おいしくて……」

泣きながら切れ切れに言うママの姿を、祖母は大笑いしながら眺めている。ママも泣きながら笑っていて、私も笑っている。なんか今、すっごく幸せだ。なんだか、きつと誰も悪くなくて、何かの歯車がほんの少しだけ掛け違ったせいで、全員がたまたま不幸になってしまっただけなのではないか、と思った。ママは泣き笑いながら、祖母の料理もお茶も、懐かしい、美味しい、と言いながら食べていて、居間は笑い声に満ちている。私は、この瞬間がずっと続けばいいのにと思った。

「あたし、もうじき結婚するから。だから美夜を連れて東京に戻る」

しかしママは朝ごはんを食べ終わって落ち着くと、そう高らかに宣言した。

「えっ」

私と祖母の声が重なった。

「私、まだ行くなんて言っていないんだけど……」

「どういふことよ七海」

私と祖母が捲し立ててもママは素知らぬ顔で、もう決めたんだもと口を尖らせている。相変わらず本当に子供みたいだ。

「美夜は行くって言ってないのよね？」

祖母が聞いて、私は頷いた。祖母が深いため息をつく。

「七海、あんた今まで美夜に何してきたかわかっているの」

「わかっているよ。けどいっぱい反省して謝って、美夜も許してくれたし、それにお金持ちで良い人捕まえたから、これからは幸せな家庭を築くし、だから美夜も来るよね？」

「ねえ馬鹿じゃないのあんた。もうあんたに美夜を渡せるわけじゃないじゃない」

「あたしの娘なんだからあたしが決めていいでしょ。口出さないでくれない」

「どの面下げて言ってるのよ。私の孫でもあるのよ」

母娘の言い合いの剣幕に圧倒されて、私は黙っていた。私はママと一緒に行くとも許すとも言っていないけれど、まあママは何でも都合よく解釈するから仕方ない。ママが今までどれだけのことをしてきて、言い分がどれだけ支離滅裂で自己中で子供じみていても、私はそんなママでもやっぱり好きで、私はどこかおかしいのかも知れない。私は、これからどうしたら良いのだろうか。

「美夜はどうしたい？」

あの日と同じ、静かなよく通る声で、祖母が聞いた。どうしたらいいのだろうか。まったくわからなかった。



「私は」

とりあえず口を開いた。

「私は、普通、になりたい……」

言葉とともに涙が溢れた。口に出して初めて気付いた。私はずっと《普通》になりたかった。けど、《普通》っていったい何だろう。東京での生活はたぶんものすごく異常だった。ここに住む同級生たちは《普通》に見えるけど、本当にそうなのだろうか。でも私はあの子たちみたいになりたい。何の屈託もなく笑ってみたい。やっと近づけたように思っても、どうしても乗り越えることのできない壁をふと感じてしまう瞬間が辛い。私は《普通》の家庭で《普通》に生まれて《普通》に育ってみたかった。できることなら、ママと一緒に人生をやり直したい。でも、私はもうすぐ十四歳だ。ずっと異常の中で過ごしてきた私は、いったいこれからどう生きていったら良いのだろうか。

「普通って、どういうこと？」

祖母が優しく声をかけたが、私は泣きじゃくりながらわからないと弱々しく繰り返すことしかできなかった。だって、私の求めている《普通》は、きっと今更願ったって手に入らない。私の十四年近い年月はすでに奪われて、心も身体にもたくさん傷をつけられているのだから。これからどうしたらいいのか、私にはわからなかった。

「こっちでその人と暮らせないの？」

祖母が聞いた。私も、それが一番良い案だと思った。

「え、どうなんだろう。会社が東京だし、たぶん無理なんじゃないかなあ」

ママはとぼけたような顔をしている。私は、もうわかってしまった。きっとママは私のことをあまり考えていない。ママはそもそも母親に向いていない。それなのに、私はママのことを嫌いにならない。離れたくないし、一人にしたいくないと思う。でもきっと、私は、ママと一緒にいたら幸せにならない。

「ママ」

声を絞り出した。ママがきらきらとした目で私を見つめる。

「ごめん、私、ママと一緒にには行かない」

ママが目を見開く。私は俯いてぎゅうと目を瞑り、そして深く息を吸って、ふう、と長く吐いた。

「私は」

私は顔を上げ、目をぱっと開いた。

「私は、とりあえずここで暮らしたい。私はママに左右されずに、自分の人生を生きてみたい。ママのことはこの先もずっと許せないと思う。でも私は、やっぱりママのことが好きだし、たった一人の親として、大切だとは思ってる。だから、ママはママで、自分の人生を生きて、幸せになってください」

途中から涙声になりながら、私は一気に言い切った。ママは静かに涙を流していた。

「七海、あなたはどうするの」

祖母が聞いた。ママはしばらく黙ったあと小さい声で言った。

「あたしは、東京に戻る。結婚する」

ああ、やっぱりママはそういう人なんだな。結局、娘より男をとるんだ。私はなんだかもう呆れを通り越して、ふっと笑いが込み上げてきた。本当にママはどうしようもない人だ。祖母も隣で苦笑いをしている。

「七海。七海は親としては失格だと思う。でもたった一人の娘として、私は七海のことを大切に思ってるから。だから七海には幸せになってほしいし、もしどうしようもなくなったらいつでも帰ってきたらいい。私のできる限りのことはするから」

美夜、お母さん、ごめんなさい、ありがとう、と繰り返しながら、ママは声をあげて泣いていた。

ママが帰ると言って荷物をまとめて玄関に向かって、私と祖母もついていった。



「ママ、私が成人したらさ、いっぱい遊びに行ったりしようよ」

私が言うともママは笑って、私のほうに両腕を伸ばした。私はママの腕の中に飛び込んで、嗅ぎ慣れたママの匂いを深く吸い込んだ。

「七海、いつでも帰ってきていいからね」

祖母はそう言ってママを軽く抱きしめた。

「美夜、お母さん、ごめんなさい。またね」

ママは目に涙をためて口をきっと結んだあと、白い歯を見せて笑って、くるりと背を向けて去っていった。

もうすぐ夏休みが終わる。結局課題に手がつけられていない。スマホを見ると友達から連絡がたくさん入っていた。みんな課題に追われているようだ。とりあえず今はそれを片付けないと。私はうーんと伸びをした。

一週間後、私は十四歳になる。普通というものが私にはよくわからない。もしかしたら一生わからないのかもしれない。それでも、私は私の人生に、ようやく自分の足で一步を踏み出そうとしている。生きるって、きつとすごく大変なことだ。でも、悩んで、苦しんで、もがきながらも前に進んで、そしていつか、これが私だ、って胸を張って言えるようになりたい。ふと目をやると、富士山が、なんだか笑っているように見えた。